

# 日本ジョージ・エリオット協会

## 第24回全国大会プログラム

日時 2021年12月11日(土) 10:00~18:00

場所 Zoomを利用したオンライン開催(詳細は追って連絡いたします)

入室 10:00

総合司会 神戸女学院大学非常勤講師 佐藤エリ

開会の辞 10:05~10:10 龍谷大学理工学部専任講師 谷綾子

研究発表 10:15~11:35

司会：東京家政大学教授 谷田恵司

1. ジョージ・エリオットはどのように世界を描くのか：初期三作品においてエリオットが用いる共感のサインとイメージの言語

日本大学非常勤講師 堀紳介

司会：山口大学教授 池園宏

2. 絆と共感： *The Mill on the Floss* における語りの問題

京都教育大学准教授 奥村真紀

総会 11:45~12:45

司会：日本大学非常勤講師 堀紳介

会長挨拶 11:45~11:50

岡山大学名誉教授 福永信哲

休憩 12:45~13:45

シンポジウム 13:45～16:45

日本ジェイン・オースティン協会と日本ジョージ・エリオット協会の共催

題目：「深遠なる重要性を帯びた影響」——その探求の魅惑

司会：神戸海星女子学院大学名誉教授 惣谷美智子

(エリオット/オースティン協会)

女性の教育と生活の資—Austen と Eliot における Wollstonecraft の遺産

講師：名古屋経済大学名誉教授 川津雅江(オースティン協会)

初期作品からみるジェイン・オースティンとジョージ・エリオット

講師：白百合女子大学教授 土井良子 (オースティン協会)

Jane Austen と George Eliot の匿名性と作品を取り巻く「視点」

講師：慶應義塾大学教授 永井容子 (エリオット協会)

<見誤り>の悲喜劇—*Emma* と *Middlemarch*—

講師：神戸市外国語大学教授 新野緑

(エリオット/オースティン協会)

特別講演 16:55～17:55

司会：フェリス女学院大学名誉教授 久守和子

演題：ジョージ・エリオットはジェイン・オースティンから何を  
受け継いだのか？—『ミドルマーチ』における<分別>と  
<多感>

講師：京都大学大学院教授 廣野由美子

閉会の辞 17:55～18:00

兵庫教育大学名誉教授 大嶋浩

日本ジョージ・エリオット協会

(The George Eliot Fellowship of Japan)

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

TEL : 087-899-7152 (直通)

E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage: <http://www.g-eliot.jp/>

## 研究発表レジュメ

### ジョージ・エリオットはどのように世界を描くのか： 初期三作品においてエリオットが用いる共感のサインとイメージの言語

堀紳介（日本大学非常勤講師）

ジョージ・エリオットはどのように世界を描くのか。これはシンプルで最も難解な問いであろう。そして、この複雑さはエリオットのリアリズムの難解さを表すことにもなる。彼女のリアリズムはただ現実世界を模写することを推奨するものではない。その描写にはサインとメタファーの複雑な言語、そして視覚的なイメージがあふれている。サインはある一つの物を観察することで引き出され、見る者にイメージを与える。そのイメージが想起されることで他の物体との差異、その観察物の特異性が明らかになる。エリオットのリアリズムは登場人物にサインやイメージを正確に見て、その視覚的経験を共感の意識へと繋げていくことを求める。

本発表では初期三作品（『牧師館物語』 (*Scenes of Clerical Life* 1858)、『アダム・ビード』 (*Adam Bede* 1859)、『フロス河畔の水車場』 (*The Mill on the Floss* 1860))におけるサインとイメージの言語表象に注目する。そして、登場人物（たとえば、『アダム・ビード』ではヘティ・ソレルやダイナ・モリス）がそれらの抽象的な物体を見ることができるのか、できるとすればどのように見るのか、そしてそれを自らの共感的意識へとどうつなげていくのかを考える。

### 絆と共感： *The Mill on the Floss* における語りの問題

奥村真紀（京都教育大学准教授）

*The Mill on the Floss* (1860)は、主人公マギーに焦点を当てて、その苦悩や精神的葛藤を描き出しつつ、彼女の人生をたどる物語である。その人生とは、一つの時代に一つの場所に生きた一人の女性の歴史であり、時間軸に沿って物語が進んでいくのは当然であるが、物語はまた、彼女を取り巻く社会や人々という空間的広がりも頻繁に描き出す。マギーは時間的存在として作品に存在しながらも、直線的に成長に向かっていくヒロインではなく、常に立ち止まって他者との関わりや共感を必要とし、その人生は家族とのつながりや絆という点において語られるのである。換言すれば、物語においてマギーが人生の岐路に立つ時に常によりどころとする記憶とは、過去の自分と現在の自分の時間的連続性の確認というだけでなく、家族や兄とのつながりという他者との絆の確認でもある。そしてマギーの人生を語る語り手は、読者に対して彼女への共感を顕著に促しているように思われる。本発表では、一人の女性の歴史が、作者の自伝的試みを超えて、人類の歴史に重ねられていくその語りの意味を考察する。

## シンポジウム要旨

司会 惣谷美智子（神戸海星女子学院大学名誉教授）

F. R. Leavis は、その著 *The Great Tradition* において、エリオットをオースティンの伝統に連なるものとして、エリオットに対するオースティンの「深遠なる重要性を帯びた影響」を示唆しているが、示唆に止めている。偉大な独創的作家間の影響を明確にすることなど困難極まりないというのが彼の理由だが、両作家はともに「偉大な伝統」上にあり、19世紀を代表する2人の関係性の謎は今も私たちを魅惑してやまない。本シンポジウムは2学会が共催であり、以下の概要が示すように、それぞれ講師の自由で多彩な切口によってエリオットとオースティンを、ときに激しく、またゆるやか交差させながら2作家像を浮き彫りにしていきたい。フロアも巻き込んでこれら2人の作家間に文学的化学反应のようなものが生じればと願っている。

### 女性の教育と生活の資—Austen と Eliot における Wollstonecraft の遺産

川津雅江（名古屋経済大学名誉教授）

ジョージ・エリオットが書評「マーガレット・フラーとメアリ・ウルストンクラフト」(1855)でウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』(1792)を再評価したとき、特に注目したのは、女性は知性を育む教育を受ければ、専門職を含む様々な仕事に就き経済的自立を果たすことができる、そうすれば女性は男性に隷属する状態から解放され、生活のために結婚することはなくなる、という箇所である。女性の教育と職種拡大は、19世紀中期に興った女性運動の活動家たちが組織的に取り組んだ問題だった。そして彼女たちの思想的基盤が『女性の権利の擁護』だったことは、エリオットの親友で女性運動活動家の一人バーバラ・リー・スミスの『女性と仕事』(1857)を見ても明らかだ。

エリオットは活動家ではなかったが、同時代の女性運動を支援した。一方、ジェーン・オースティンはレイ・ストレイチー(1928)によって、エリオットの時代の女性運動の先駆者の一人に数えられており、クレア・トマリン(1997)によれば、ウルストンクラフトの本を知っていたらしい。そこで、本発表では、女性の教育と経済的自立に関するウルストンクラフトの思想に焦点を絞って、オースティンとエリオットがどのようにウルストンクラフトの遺産を受け継ぎながら、女性運動の発展に貢献したのかを探ってみたい。具体的には、『エマ』(1815)と『ミドルマーチ』(1871-72)にそれぞれ登場する家庭教師から主婦になったウェストン夫人とガス夫人の描写を中心に、教育と生活の資の獲得の関連に関する二人の小説家の考えを比較・検討する。

使用予定主要文献

- Austen, Jane. *Emma*. Edited by Richard Cronin and Dorothy McMillan, Cambridge University Press, 2005. (特にchs. 1, 3, 5, 10, 20, 53)
- Caine, Barbara. *English Feminism 1780-1980*. Oxford University Press, 1997.
- Eliot, George. "Margaret Fuller and Mary Wollstonecraft." *Leader*, no.6, 13 October 1855, pp. 988-89. *Essays of George Eliot*, edited by Thomas Pinney, Routledge, 1963, pp.200-06.
- . *Middlemarch: A Study of Provincial Life*. 1874. Edited by David Carroll, Oxford University Press, 1986. (特に bk.2. ch.15, bk. 3. chs. 23, 24)
- Fuller, Margaret. *Woman in the Nineteenth Century: An Authoritative Text, Backgrounds, Criticism*. Edited by Larry J. Reynolds, W.W. Norton, 1998.
- Harris, Margaret, editor. *George Eliot in Context*. Cambridge University Press, 2013.
- Scheuemann, Mona. *Her Bread To Earn: Women, Money, and Society from Defoe to Austen*. 1993. University Press of Kentucky, 2015.
- Smith, Barbara Leigh. *Women and Work*. London, 1857.
- Strachey, Ray. *The Cause: A Short History of the Women's Movement in Great Britain*. 1928. Random House, 1988.
- Todd, Janet. editor. *Jane Austen in Context*. Cambridge University Press, 2005.
- Tomalin, Clare. *Jane Austen: A Life*. 1997. Vintage Books, 1999.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman. The Works of Mary Wollstonecraft*, edited by Janet Todd and Marilyn Butler, vol. 5, Pickering, 1989, pp. 61-266. (特に Introduction, chs.1, 9, 12, 13)

### 初期作品からみるジェイン・オースティンとジョージ・エリオット

土井良子 (白百合女子大教授)

本発表では、ジェイン・オースティンとジョージ・エリオットの少女期の創作を取り上げ、後年の小説作品との関係について考えたい。

10代のオースティンが1790年代前半まで作品を書き込んだノートからは、彼女が小説や芝居の脚本、詩など意識的に多様なジャンルの創作に挑戦していたことが分かる。実際作品はこれらのジャンルの典型を反手本としたパロディが大半であり、文学的慣習や礼儀作法のコードを大胆に誇張・反転させ、読者の笑いを呼ぶ仕掛けとして利用している。そこでまずその特徴を『イングランドの歴史』(1791)や『ヘンリーとイライザ』(1788)を例に把握したうえで、後の六作品に最も近いと言われる『キャサリン、あるいは東屋』(1792)を

経て、それが 1790 年代後半に原型が書かれたとされる 3 つの小説においてどう変容しているかを確認する。

一方ジョージ・エリオットの初期作品としては、14 歳の頃書かれたと思われる未完の歴史小説「エドワード・ネヴィル」(1834)が発見されている。

しかし、エリオット自身が小説家としてのキャリアの出発点で書いた 1857 年の日記では「いつか小説を書くことは長年の漠然とした夢であった」(*The Journals*, 289)と認めつつもこの作品への言及はない。代わりに初の出版作となった『牧師たちの物語』(1858)出版までの経緯が述べられており、また『牧師たち』執筆直前に書かれた書評でも彼女の小説観が表明されている。これらの 1856~7 年の書評や日記を手がかりに、「エドワード・ネヴィル」を書いた少女マリアンがいかにして、最初の原稿からその完成度の高さで編集者を驚かせた『牧師たちの物語』の作者エリオットとなったのかを考えてみたい。

どちらの作家も、初期作品と小説家としての出版作には大きな隔りがあるように感じられる。出版作品の中に、一見異質に思われる初期作品との類似点を探ることで、それぞれの作家の全体像を掴む手がかりが得られると期待している。

#### 使用予定主要文献

- Alexander, Christine and Juliet McMaster, editors. *The Child Writer from Austen to Woolf*. Cambridge UP, 2005.
- Austen, Jane. *Juvenilia*. Edited by Peter Sabor, 2006. *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*, general editor, Janet Todd, Cambridge UP.
- . "To James Stanier Clarke, 11 December 1815." *Jane Austen's Letters*, edited by Deirdre Le Faye. OUP, 1995, pp. 305-06.
- Doody, Margaret Anne. "Jane Austen, that Disconcerting 'Child.'" Alexander, pp. 101-121.
- Eliot, George. "Edward Neville." Haight, Appendix I, pp. 554-62.
- . *Edward Neville by Marianne Evans (George Eliot)*, edited by Juliet McMaster et al., Juvenilia Press, 2009.
- . *Scenes of Clerical Life*, edited by Thomas A. Noble, Oxford UP, 2015.
- . "Silly Novels by Lady Novelists." *Essays of George Eliot*, edited by Thomas Pinney, Routledge/Taylor & Francis Group, 2016, pp. 300-24..
- . *The Journals of George Eliot*, edited by Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge UP, 1998. pbk, 2000.
- . "The Natural History of German Life." *Essays*, pp. 266-99.
- Haight, Gordon S. *George Eliot: A Biography*. OUP, 1968.
- McMaster, Juliet. "Choosing a model: George Eliot's prentice hand." Alexander, pp. 188-99.

## Jane Austen と George Eliot の匿名性と作品を取り巻く「視点」

永井容子（慶応義塾大学教授）

評論"The Lady Novelists" (*Westminster Review*, July 1852)において George Henry Lewes は、女性文学の意味を追究し、「文学のあらゆる部門の中で、女性は生まれながらに、また経験によって、小説に最も適している」と論じている。もし、自ら体験したことのみを表現することが作家に求められているとしたら、他者の「視点」と引き換えに自分の「視点」を手放すべきではない、つまり、女性作家は男性作家を模倣するのではなく、女性として小説を執筆すべきである、と彼は力説している。小説の大多数が匿名で発行されていた 18 世紀および 19 世紀前半、Austen は生前発行したすべての小説に自らの名前を書き記さず、Marian Evans もまた匿名もしくは George Eliot という偽名を使って作品を発表したことは周知の事実である。Austen と Eliot は、女性作家としての身分を隠しつつも、女性の「視点」を用いて Lewes が思い描くような小説の理想を果たすことができたのであろうか。二人の女性作家の匿名性は、ただ単にその時代の出版慣習の一つとして片付けることはできず、もはや作品、作者、読者を取り巻く「視点」の問題と密接に関係している。本発表では、Lewes の Austen 論を起点とし、Austen の *Emma* (1815) と Eliot の *Adam Bede* (1859) と *Middlemarch* (1871-72) を参照しながら、二人の女性作家の共通点と相違点を「視点」という観点から考察し、「匿名性」との関連性を探りたい。

使用予定主要文献

### Primary Sources

Austen, Jane. *Emma*, Modern Library, 1992.

---. *Jane Austen's Letters*, ed. by Deirdre Le Faye, 4<sup>th</sup> ed., Oxford UP, 2011.

Eliot, George. *Adam Bede*, ed. by Carol A. Martin, Clarendon P, 2001.

---. *Essays of George Eliot*, ed. by Thomas Pinney, Routledge and Kegan Paul, 1963.

---. *The George Eliot Letters*, ed. by Gordon S. Haight, Yale UP, 1954-78, 9 vols.

---. *George Eliot's Life as Related in her Letters and Journals*, ed. by J. W. Cross, Harper & Brothers, 1885, 3 vols.

---. *Middlemarch*, ed. by David Carroll, Clarendon P, 1986.

---. *Selected Essays, Poems, and Other Writings*, ed. by A. S. Byatt and Nicholas Warren, Penguin, 1990.

Lewes, George Henry. "The Lady Novelists." *Westminster Review*, vol. 58, 1852, pp. 129-41.

- . "The Novels of Jane Austen." *Blackwood's Edinburgh Magazine*, vol. 86, 1859, pp. 99-113.
- . "Realism in Art: Recent German Fiction." *Westminster Review*, vol. 70, 1858, pp. 488-518.

#### Secondary Sources

- Beer, Gillian. *George Eliot and the Woman Question*. Edward Everett Root, 2019.
- Cook, D. and A. Culley. *Women's Life Writing, 1700-1850 Gender, Genre and Authorship*, Palgrave Macmillan, 2012.
- Dussinger, John A. *In the Pride of the Moment: Encounters in Jane Austen's World*. Ohio State UP, 1990.
- Garrett, Peter K. *The Victorian Multiplot Novel: Studies in Dialogical Form*. Yale UP, 1980.
- Garside, Peter. "Authorship." *The Oxford History of the Novel in English*. Vol.2: *English and British Fiction 1750-1820*, ed. by Peter Garside and Karen O'Brien, Oxford UP, 2015, pp. 29-52.
- Kroeber, Karl. *Styles in Fictional Structure: The Art of Jane Austen, Charlotte Bronte, George Eliot*, Princeton UP, 1971.
- Patteson, Richard F. "Truth, Certitude, and Stability in Jane Austen's Fiction." *Philological Quarterly*, vol. 60, 1981, pp. 455-69.
- Wallace, Tara Ghoshal. *Jane Austen and Narrative Authority*, Macmillan, 1995.

#### <見誤り>の悲喜劇—*Emma*と*Middlemarch*—

新野緑（神戸市外国語大学教授）

G・H・ルイスはオースティンを高く評価して、当時 *Jane Eyre* を刊行したばかりの新進女流作家シャーロット・ブロンテに、オースティンの作品を読むように奨めたという。オースティン作品の中でも彼がとりわけ評価した *Mansfield Park* や *Emma* を読んでいる、とジョージ・エリオットが日記に記したのはその10年後の1857年だ。あたかも処女作“The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton”を発表した彼女が、その連作となる“Mr Gilfil's Love Story”や“Janet's Repentance”を続けざまに執筆、上梓して、小説家として着実なスタートを切った時期と一致する。それは単なる偶然か。この時期、オースティンのみならず、ハリエット・マーティノーやエドマン



ド・バーク、など様々な作家の作品を読んだと彼女は日記に記してはいるが、その創作活動に大きな影響を及ぼしたルイスのオースティンへの高い評価や、執筆への不安からか抑鬱状態に悩んだエリオットが、この時期オースティンの作品を二つも読んだと語っていることを思えば、オースティンという先輩作家の存在は、小説家エリオットの誕生に無視できない役割を担っているように思われる。果たして、オースティン作品はエリオットの創作活動にどんな影響を与えたのか。

*Emma* が、自身の頭の良さを過信するヒロインを中心に、登場人物たちの様々なく見誤り>がコミュニティや人間関係に生み出す多様なドラマを、その彼女をも突き放す冷徹な視点から皮肉とユーモアを交えてコミカルに描いた物語であれば、知的渴望に駆り立てられて相手の本性を<見誤って>結婚したヒロインが、夫への幻滅と妻としての義務感の狭間で葛藤の日々を過ごした末に、ある種の諦観に至る過程をヒロインの心理の奥深くに分け入って克明に描き出す *Middlemarch* は、オースティンの *Emma* と同様のテーマを、しかもヒロインのみならず彼女の夫の視点も交えた広範な角度から、より深刻な形で展開することになる。しかし、語りの形態もプロット展開も物語の調子も全く異なるように見えるふたつの作品を仔細に検討してみると、ヒロインやその周囲の登場人物の人物造形や人間関係、そして何より他者や自己に対する認識の行為が孕む問題性の探究という点において、この二つの作品には思いがけない類似が数多く潜んでいるように思われる。*Emma* と *Middlemarch* の類似と差異を、登場人物たちの<見誤り>に焦点をあてて仔細に検討することで、エリオットによるオースティン理解の一端を探り、19世紀イギリスを代表する女性作家二人の特質を明らかにしたい。

使用予定主要文献

Austen, Jane. *Emma*. Penguin, 1996; 2003.

Eliot, George. *Middlemarch*. Penguin, 1994.

---. *The Journals of George Eliot*. Ed. Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge UP, 1998.

---. *George Eliot: Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford UP, 1992.

---. *The George Eliot Letters*. Vol. 2. Ed. Gordon S. Height. Yale UP, 1954.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Penguin, 1975.

Lewes, George Henry. 'Recent Novels: French and English', *Frazer's Magazine* (December, 1847). 'Review of *Jane Eyre* by George Henry Lewes', *British Library*.  
<https://www.bl.uk/collection-items/review-of-jane-eyre-by-george-henry-lewes>

Lodge, David. *The Art of Fiction: Illustrated from Classic and Modern Texts*. London: Penguin, 1992.

*Middlemarch in the 21<sup>st</sup> Century*. Ed. Karen Chase. Oxford UP, 2006.

特別講演「ジョージ・エリオットはジェイン・オースティンから何を受け継いだのか？  
—『ミドルマーチ』における〈分別〉と〈多感〉—

講師：廣野由美子（京都大学大学院教授）

「ジョージ・エリオットはジェイン・オースティンから何を受け継いだのか？」という問題について、〈分別〉と〈多感〉をキーワードに論じる。具体的には、『ミドルマーチ』と『分別と多感』を取り上げ、両作家の作品の比較考察をとおして、イギリス小説の特性を探る。オースティンやエリオットとの出会いからイギリス文学研究を始めた私自身の経歴、そして、『ミドルマーチ』の翻訳作業をとおして発見したことなどについても、触れたい。著書には『深読みジェイン・オースティン』（NHK ブックス）、『小説読解入門—「ミドルマーチ」教養講義』（中公新書）、翻訳書にはティム・ドリン著『ジョージ・エリオット』（彩流社）、『ミドルマーチ』（光文社古典新訳文庫、全4巻）がある。